全唐诗目录索引

唐代研究のしおり

第 4

唐代の詩人

平岡武夫
市原亨吉

同朋舎
1977

唐代研究のしおり 第四 唐代の詩人

昭和52年11月15日発行　　定価7,000円

編　者　平岡武夫・市原亨吉

発行所　株式会社 同朋舎出版
京都市下京区中堂寺鍵田町2

印刷所　株式会社 図書印刷 同朋舎
京都市下京区中堂寺鍵田町2

801097

I222-742
<2>
801037

復刊のことば

時間と場所とそして人と，この三本の柱が歴史を構成する。私が唐代に関心を持った時，これらの柱を明確にした書物があれば，研究にどれほど便利なことかと思った。例えば暦。唐代では八回の改暦が行われ，そのつど基本常数と計算方法を改めている。それ故に唐代の暦は各時期の暦日をそれぞれの暦法によって算出しなければならない。しかも唐代の暦はこの計算だけでは完成しない。蝕や冬至などの関係から人為的な操作が加えられてもいる。それらを文献の方から明らかにしなければならない。

場所について言えば，唐代に存在した府・州・郡・県の名をすべて網羅し，それぞれに主要な地理書の記述個所が示されているならば，研究途上に出合う土地を掌上に求めることができて，随分と便利ではないか。改廃・離合の跡も等級も容易に辿ることができる。長安と洛陽は，唐代の歴史の中心舞台であるから，特に詳細な資料・索引・地図が編集されねばならない。

唐代の文化の担い手は詩を作り文を綴る。唐代の有名人で詩文と無縁の人はいなかったであろう。それでは，詩の作者・文の筆者には誰々がいるのか。その人たちの作品には何々があり，それを何処で見ることができるのか。それを求める際に，それらの作品の篇題に登場する人物まで検索できるようにしてあれば，唐代の文化の担い手を殆んど薬籠中に置くことになるであろう。

これらはみな誰かが用意しなければならぬものである。私はその必要性を痛感するが故に，敢えてこの要求をみたす書物の製作に従事したのである。そして同じような研究のしおりが，漢代にも，三国六朝のそれぞれにも，宋・元・明・清にも，しかるべき時期ごとに，しかるべき研究者によって作られることを期待していた。その期待は今日もなお満たされることなく持ち続けられている。

また私たちは唐代の文学作品を読むためには，よいテキストと語彙索引をそろえたいと望んでいる。宋版『李太白文集』の影印と花房博士のその索引は，この要望に答えた先駆的な業績である。さいわいにこの方面の語彙の索引は次々に作られている。

この一連の『唐代研究のしおり』が今更めて研究者の需要に応じてお役に立つ機会をもったことは大きな喜びである。『文選索引』は唐代文学の研究にも不可欠のものであり，このシリーズの誇りでもあるが，既に別に印行されているので，このたびは出版社の意向により除いた。

平岡武夫

22226574
徐州师范图书馆

T'ANG POETS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

唐代の詩人

T'ANG CIVILIZATION REFERENCE SERIES No. 4

T'ANG POETS

TAKEO HIRAOKA

and

KÔKICHI ICHIHARA

JIMBUNKAGAKU KENKYÛSHO

KYOTO UNIVERSITY

JUNE 1960

唐代研究のしおり　第四

唐代の詩人

平岡武夫
市原亨吉

京都大學人文科學研究所
1960年6月

TO STUDENTS OF T'ANG CIVILIZATION

唐代文化を研究する人々におくる

PRINTED IN JAPAN
BY THE "DÔBÔSHA" PRINTING CO. LTD.
同　朋　舎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

唐代の詩人序説

このシリーズの第3〝唐代の散文作家〟の姉妹篇として，この〝唐代の詩人〟を製作して同志の人人におくる。このシリーズが1954年4月に最初に出版したものが〝唐代の散文作家〟であった。それから現在までにすでに12冊を出しているが，この第4を印刷する機會が今日までなかった。いまその缺を滿たすことができたのである。私の大きな喜びである。

唐代の詩人は，唐代文化の最大の擔い手である。詩を作ることにおいて，彼らは唐代の文化を生活したのである。その詩は唐代世界を語る最も切實な記錄である。さらに唐代の詩は漢字文化の精華である。漢字文化の本質を知ろうとするものは，唐詩を除外しておれない。唐代の詩人と詩篇を適當に整理して掌上に運用することは，專攻の分野がいずれであろうとも，唐代の，ひろくは漢字の，文化に關心を持つ人人に必要なことである。この必要にこたえて，この書物が編集された。

編集の體例は，當然ながら，〝唐代の散文作家〟のそれと同樣である。併せ用いて下さるならば，さいわいである。

取り上げた書物は，〝全唐詩〟と〝全唐詩逸〟の二つである。

全唐詩 900巻　清朝の康熙44年3月（1705年）に勅命を受けて兩淮鹽政が揚州詩局を設けて編集に着手した。45年10月に完成し*，46年4月に御製序をつけて刊行した。編集校訂に當ったものは，彭定求ら10人。

* 曹寅の〝進全唐詩表〟による。つづいて述べる彭定求の年譜では，46年1月校畢という。この版は康熙帝のもとに送られた。そして殿版の一つになった。〝欽字〟といわれる楷書體で刻された，清朝版本のすぐれたものの一つである。

彭定求は康熙15年に會試に首席で合格した。つづく殿試では，第三名に

おかれた。文字の上手さが第1・2名に及ばないというのが，試験官の説明であった。しかし康熙帝は答案の内容に重點をおいて，彼に狀元の名譽を與えた。このことは，彼が後に全唐詩の校刊官を命ぜられたことと無縁でない。この年，彼は翰林院修撰を授けられた。そして，ずっと側近に侍し，康熙24年に國子監司業となり，27年に翰林院侍講となり，33年にその職を退き，鄉里の長洲に歸った。しかるに，44年3月に康熙帝の南方巡幸が行われた。これが彼に新しい任務をもたらした。翰林院において殊遇を受けた彼が常州の行宮に赴いて敬意を表したことは，當然である。この時，康熙帝は特旨をもって彼を校刊全唐詩官に任命した。侍講として，退職期間をも加算した待遇を與えた。彼はすでに61才である。康熙帝の政治の一つのすがたがここにある。彭定求は感激の詩を作っている。

三月二十日行在奉旨校刊全唐詩。（南畇詩稾乙酉集 上6b。乙酉は康熙44年）

一從移疾掩柴關。浩蕩恩施久就閒。自問姓名鉛槧外。尚蒙記憶草茅間。

編摩鄭重登詩苑。棲託分明近道山。欲報涓埃微志在。白頭敢綴紫宸班。

自注。旨許銷假。卽行叙俸陞轉。定求老病未能也。

〝南畇老人自訂年譜〟を見ると，〝四十四年五月。赴詩局。九月。暫歸〟と記す。3月に命を受けて5月に揚州に設けられた詩局へ出發している。この日の感懷を，彼は詩にしている。

將赴詩局。題南畇壁。（乙酉集 下1a）

種竹栽蓮老自便。豈期乍出草堂前。縱非奉檄通朝謁。何似鍵關任坐眠。

結束書囊才本澁。商量藥裹疾猶延。兒孫好爲除庭宇。容我歸依水石緣。

彼に〝雪晴〟と題する詩がある。やはり乙酉集（下15b）に收めている。

薄霰逢初霽。窮陰幸不侵。黃濡梅蕚綻。翠洗竹筠深。

案有高僧集。門無俗客尋。悄然棲寂處。好辦出塵心。

第5句の下に〝時方校齊己皎然諸集〟と自注がある。この詩は，この時期

における彼の校詩ぶりと分擔を示す。彼は釋家に關心を寄せていた。

さらに彼の年譜を見ると，〝四十五年二月。赴揚州校詩。九月。暫歸。十月。復至揚州。十一月。歸。四十六年正月。赴揚州校全唐詩畢。五月。回籍〟と記す。着手から完成まで，あしかけで數えても一年と八カ月でしかない。しかも10人の編集者のうち，汪繹は45年7月に死んでいる。このように僅かな時間と人手によって900巻の書物が出來上ったのは，明の胡震亨の編集する〝唐音統籤一千三十三巻〟と清の康熙12年に季振宜の編集する〝全唐詩七百十七巻〟がすでにあって，それを利用することができたからである。

有名無名すべての詩人の詩を集める總集の價値は，むしろ個個の詩人に深い關心を持つ時に認識される。たとえば白樂天の詩を讀む時，交渉をもつ人人の作品を見る必要が生じるからである。唐詩全般を見わたすためには勿論のこと，個個の詩人を見きわめるためにも，總集は必要である。

全唐詩は要領よく早い仕事をしてはいるが，それだけに粗漏のあることを免れない。私たちは唐人選唐詩集・唐詩紀事・文苑英華・唐文粹・樂府詩集・唐音統籤および個個の詩人の別集について整理を進めているが，多くの問題を全唐詩との間に見出している。また，全唐詩の當時からすでに二世紀半を經過している。その間に，より完全なテキストも學界に提供された。敦煌の調査も行われた。作者についても作品についても，多くのすぐれた研究がなされた。未收詩篇の增補においても，テキストの校訂においても，すなわち量的にも質的にも決定版の再編集を待っている。しかし，そのためにも，ここにある全唐詩について一おうの整理をしておくことが必要である。まして季氏の書物は刊本がない。統籤も，もともと，全部が刊刻されていない。私たちが現在整理の對象にすることができるのは，甲・乙・丙・戊・癸の五籤だけである。しかも詩論詩話の類である癸

籤の他は，なかなかに入手困難であり，甲乙丙の三籤に至っては，我が國では廣島大學に藏するのみ。それ故に，私たちの念願する決定版が完成する日までは，この全唐詩が最大の總集である。

揚州詩局で版にされた全唐詩は，120冊に製本されている。この版本は全巻に通し番號をつけていないために，檢索に不便である。また，この版本は善本すぎて普及度が低い。光緒元年（1875年）雙峰書屋が重刊した袖珍本120冊は，詩局本が目錄にだけ附けていた函と冊の數字を，各葉の版心に附けている。しかしこれも利用の便利の上から言って，光緒13年の上海同文書局の影印本に及ばない。通巻の巻數があり，普及度も高く，冊數も少いからである。遺憾なことに，この書局本は詩局本の忠實な影印本ではない。それ故に私たちは詩局本にさかのぼる用意を常に忘れてはならない。巻末に兩者の構成の對照表を掲げておく。

全唐詩逸3巻　市河世寧（1749～1820）の編。世寧は寛齋と號す。上州の人。昌平黌の都講であった。遣唐使や留學僧が將來した唐人の詩句の，中國に逸してわが國にのみ傳わるものを集めて，この全唐詩逸を作った*。上冊に45人，詩22，句124を，中冊に80人，詩12，句139を，下冊に無名氏の作品と遊仙窟の中の詩と李嶠の詩と，併せて詩38，句16を，收めている。各篇にもとづく所を記している。この用意は正しい。全唐詩にはこれがない。出版にも苦勞している。版下を子の米庵が心をこめて書いた。半葉11行，行21字の版式も，軟字の書體も，全唐詩に倣うている。友人の下田衡が資を出して文化元年（1804年）に刊行した。私たちは，この刊本を用いた。米庵が別に副本を作って中國人に與えたものが，鮑氏の手にわたり，道光3年（1823年）に刊刻され，知不足齋叢書に收められている。

* 寛齋の下田衡への手紙に〝僕於全唐詩逸，拮据雖勤，其爲卷僅三，爲詩不過百數，事業固小小哉，尙且自謂，千載之後，萬里之外，擧李唐詩人於沈沒之中，比之夫世創造伽藍，翻刻經藏者，則功德不在其下矣〟という。本多夏彦，〝全唐詩逸と上毛箕輪下田氏〟，東洋

文化120～121號（昭和9年6月・7月）を参照

下冊に收める李嶠の詩の6首，私たちはこれに49470～49475の整理番號を與えた。實のところ，この6首は全唐詩がすでに收めている。私たちの整理番號の 03592・03598・03613・03625・03633・03646 がそれに相當する。市河寛齋は，それ故に，この6首を〝附〟として巻末に置いたのである。彼がこれを敢えて附錄したのは，全唐詩に載せるものに脫字があって，それを日本に傳えるものが補うからである。たとえば，全唐詩逸に載せる〝簫〟の詩は〝虞舜調清管。王褒賦雅音。參差横鳳翼。搜索動猿吟。靈鶴時來到。仙人幸見尋。爲聽楊柳曲。行役幾傷心。〟の40字からなる。全唐詩に載せるものは，これに比べて〝猿吟靈鶴時來到仙〟〝幸見尋爲聽楊柳曲行役幾傷〟の20字がない。

下冊に收める無名氏の詩13首，すなわち海陽泉・曲石亭・望遠亭・石上閣2首・海陽湖2首・盤石2首・湖下溪2首・夕陽洞・遊海門峽の諸篇は，實は元結の作品であることを，太田晶二郎氏が精密に考證された*。しかし，いまはとにかく現在ある形で整理をしておいた。同様の例は他にもある。これを元結の作品に加えることは，次の段階を待つ。

* 海陽泉帖考，歷史地理 86巻2號，1955年12月

全唐詩逸は崔致遠の詩1首（No. 49431）を收めている。全唐詩はこの人の作品をまったく收めていない。しかし，手近かの四部叢刊本〝桂苑筆耕集〟をひもといても，巻17に30首，巻20に30首を見出す，詩逸は〝千載佳句〟から採ったのであり，そこには1首しか收めていないのであるから，詩逸としてはそれを載せておくより仕方がない。しかし，私たちとしては，これで滿足しておれないことは言うまでもない。今日における最善をつくして，全唐詩の名にふさわしいように網羅した總集を再編集することを眞劍に考えるべきである。

私たちのこの書物の第Ⅰ表の構成は次のとおりである。

第一欄　詩人の姓名を四隅番號によって分類した數字を示す。檢索の便宜のためのものである。

第二欄　詩人の姓名を示す。

a．姓名は原則として，全唐詩・全唐詩逸が標題に記しているものを，そのままに記した。したがって，名よりもあざ名の方がよく通っている人，そして上記の書物があざ名を出しているものは，この第二欄もあざ名を出している。

b．詩人名の順序は，第一欄の約束から當然の結果として，四隅番號によっている。

c．四隅番號で整理しているために，複姓を特別扱いしていない。

d．無名氏のこと。全唐文では，巻960～997に闕名をまとめていた。それ故に，ことさらに表示することを要しなかった。全唐詩では巻785～787に一おう無名氏をまとめているけれども，諧謔・歌・讖記・語・諺謎・謠・酒令・占辭・詞の各類にも無名氏が出てくる。また無名鬼・無名釋・無名宮嬪・無名女鬼なども出てくる。よって唐代の詩人では特に〝無名氏〟の標題を立て，その四隅番號8033_1の位置においた。

e．名はわかっているが，姓のわからないもの，たとえば〝□疾〟などは，未詳姓氏として，巻末に集めて出した。

f．全唐詩が釋某または僧某と記しているものは，そのままに出した。釋・僧の字をつけていない場合は，やはり全唐詩のままに附けずに出した。故に，釋家の場合は，釋・僧の條にも目を向けていただきたい。

g．人の妻または宮人であって，姓しかわからないもの，たとえば〝喬氏〟〝夏侯氏〟などは，そのままで，すなわち二字目または三字目の四隅番號を〝氏〟で計算して，その順番に相當する所に出した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com